

大学博物館の問題点と改善策 CST ミュージアムの改善計画の提案

Problem and reform measure in a university museum
Suggestion of an improvement plan in a CST museum

○吉本 麗音¹, 小林 直明²

*Leon Yoshimoto¹, Naoaki Kobayashi²

A university museum is in the university. But a Japanese university museum isn't seen as important facilities. The university museum isn't also famous in Japan. But there is charm equal to a public museum. A problem in the present university museum is investigated by this study. Reform idea and a plan of building are proposed from the result. It's investigated in a CST museum in Nihon University. I'd like to make it the trigger which proposes reform idea in a CST museum and makes future's Japanese university museum develop.

1. はじめに

現在、欧米やアジアでも大学に博物館を付設するのは当然のものとなっている。もちろん日本にも大学博物館は存在しているが、平成9年での調査では大学数587に対して大学博物館は74しかない。また昭和7年、日本で初めて全国規模による博物館調査をおこなった際も、大学数45に対して大学博物館に類するものは14であった。以上の調べから見ても、日本では大学博物館はほとんど増加していないことが確認できる。

ところが、1996（平成8）年、第14期文部省学術審議会学術資料部会において『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』と題する中間報告が提出された。これにより年々、大学博物館設立の動きが高まり、国立大学だけでなく数多くの私立大学でも大学博物館の新設が相次いでいる。

そしてわが校、日本大学理工学部船橋キャンパス内にあるCSTミュージアムも立派な大学博物館の一つである。しかしながら、その存在を認知している者はわが校の生徒でも3人に1人という驚きの事実が発覚した。これは本校だけでなく、他の多くの大学でも同じ問題が起こっているという。なぜ日本では多くの博物館、美術館施設が存在しているのに対して、大学博物館を重要施設として認識し注目されていないのか。今後、大学博物館が公共の博物館、美術館施設と同じく大きく発展していくために、どのような改善案を見出すことができるだろうか。現在の問題点を、CSTミュージアムを始めとする大学博物館の調査から追及し、建築の分野から、また学芸員としての視点から考察して建築的改善計画案を考えていく。

2. 大学博物館について

現在の大学博物館は、国公立大学での学術資料の収集・保存・活用の充実を図るという機能に加え、そ

れらの学術情報を社会へ積極的に発信し、高等教育の成果を地域に還元するという教育普及活動の機能が求められている。これまでの大学博物館は、学術資料の収集・保存・活用の充実の機能のみで、教育普及活動の面においては軽視されてきていた。これは大学博物館が学術重視の伝統性に加え、学内利用重視という閉鎖的な空間利用の性質と学内利用のみに特化した施設周辺の敷地整備があるためである。大学博物館が注目されている今、学内だけでなく新たに学外にも発信していくことが今後の大きな課題となっている。しかし、大学博物館は現在の機能においても問題が確認されている。

3. CST ミュージアム

わが校である日本大学理工学部の船橋キャンパス内には、CSTミュージアム（日本大学科学技術史料センター）がある。CSTミュージアムは2004（平成16）年に開設し、そして2006（平成18）年には博物館相当施設として指定された大学博物館である。2020年には創立100周年を迎えることになる本学部の長い歴史と文化、そしてわが学部の諸先生・諸先輩の残された数々の技術と研究の業績遺産を目に見える形で継承・発展させたいという想いが設立のきっかけになったと言われている。

- (1)学術資料の収集・保存・展示し、本学部の歴史と文化を継承・発展
- (2)理工学部出身の学芸員の育成
- (3)小中高校生に科学技術の面白さや大切さを伝え、理系志願者の増加と技術社会の発展を築く。
- (4)技術史研究による博士などの学位取得する高級技術者の育成
- (5)本学部の歴史と文化の社会発信
- (6)理工学的成果によっては、実物大あるいはそれに近

1：日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering, CST., Nihon-U.

2：日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering, CST., Nihon-U.

い大きさでの展示が必要となるため、船橋キャンパスだからこそ可能にできる野外展示を採用することより、若い研究者や技術者の新たな発想を生み出すきっかけの提供

現在の CST ミュージアムにおける目的は大きく分けて以上の 6 点となっている。この施設内で展示されている情報や野外で展示されている実物大の展示物にも目を見張るものがあり、改善次第ではさらに大きな魅力を持てる場だと実感できる。しかし、現段階でこの CST ミュージアムの展示をいくら改善しても無駄になってしまう大きな問題があった。それは入館者数の問題である。これは昨年度の CST ミュージアムの年間入館者数をグラフ化したものである。

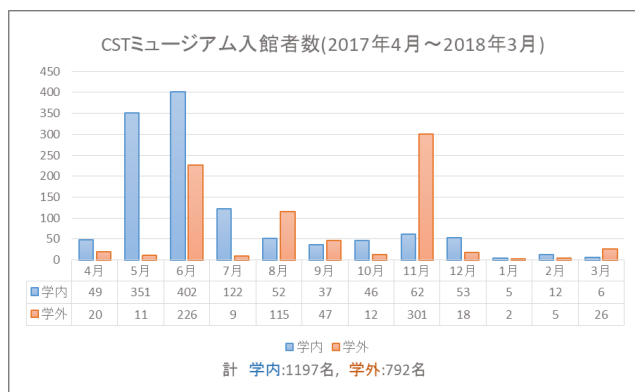


Figure 1. Data of the number of visitors

学内では 1197 名と 1000 人を超える入館者数で、学外の一般入館者においても 792 名とひと月に平均 60 人以上の一般の方が来場されていることが確認できる。だが日本大学理工学部の生徒数は、昨年度 9,316 人と 9,000 人もを超える人数があり、つまり学内では 9 人に 1 人しか来場していないことがわかる。これは単に関心を集められていないだけでなく、そもそも CST ミュージアムの存在が学内で認知されていないことが関係している。その理由はいくつか挙げられるが、一番の理由は施設の場所にあると考えられる。CST ミュージアムは船橋キャンパスの 5 号館の 2 階に設置されているが、5 号館の場所は校舎の正門から 500m 以上と遠い場所にあり、学生間でも授業の関係でそこまで足を運ぶこともあまりない。その点に加え、5 号館自体は 13 号館や 14 号館のような特別な建物というわけでもなく、古くからある教室や研究室棟と同じ建物のうちの 1 つの中にあるものなので、案内の看板を建物前に設置するだけでは他と代わり映えすることはない。アクセスが悪く、建物の外観としても中に大学博物館があるとは思えない空間、そして大学博物館をアプロ

ーチするための周辺環境整備の不十分さ、以上の点が学内での大学博物館の認知を妨げている主な原因となっていると考えられる。これらを改善する案を提示すれば、CST ミュージアムは大きな成長の可能性を生み出すことが可能になる。



Figure 2. Map in the school of Nihon University

4. リノベーション計画

これまでの調査を踏まえた上で CST ミュージアムのリノベーション計画を考える。

- (1)アクセスの悪さを補えるだけの建築的インパクトが必要だが、施設の設置場所は 5 号館の一部のため、建物の部分的なリノベーションによってインパクトを持たせる必要がある。
- (2)CST ミュージアム本来の目的からふれず、尚且つ理工学部の学術資料の特性を活かした展示空間を実現させるため、室内・野外展示の双方の魅力を互いに高めることが可能な展示空間を確立させる。
- (3)大学博物館特有の閉鎖的空間を打破するために、施設周辺のランドスケープを設計し、来場者数の増加を促す。

以上の 3 点を計画案のベースとして、リノベーション及び空間設計を行う。

5. 参考文献

[1]『日本大学理工学部科学技術史料センター 資料集』
著：安達 洋, 安部 建一 他
[2]『わが国の大学博物館の問題点とその背景』
著：守重 信郎